

Title	バルザック『アルシの代議士』をめぐって
Sub Title	Autour du Député b'Arcis
Author	高山, 鉄男(Takayama, Tetsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.31- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バルザック『アルシの代議士』をめぐる

高山鉄男

『アルシの代議士』*Le Député d'Arcis* は、『人間喜劇』中の一篇であるが、プレイヤード新版のページ数にして九十八ページ、しかも未完である。したがって従来まで、本格的な研究の対象となることがなく、コリン・スметトハーストによる、成立や草稿についての研究がさまざまな重要な事実を明らかにしたとはいえ、執筆年代ならびに主題について不明な点も多い。

I 着想と執筆

まず、この作品の着想と執筆の過程について概観すると、作者の最初の言及は、創作ノート、いわゆる *Album* に見いだされるもので、その *fol. 3* に『選挙』*Une Election* という題名が記されている。⁽²⁾『地方生活情景』中の一篇で、*15 feuilles* とあるから、たとえば八つ折り版にして、二百四十ページほどの作品として計画されていたことがわかる。しかも、続いて『老嬢』*La Vieille Fille* の主題が記されていることを考えれば、この覚え書がすくなくとも、『老嬢』の執筆開始を見た一八三六年九月以前にさかのぼることは確実である。こうして選挙を主題とする長篇小説の計画が、はじめて創作ノートに記されたわけであるが、この主題がふたたびバルザックによって言及されるのは、三年後の一八

三九年である。この年の三月刊行された『骨董室』*Le Cabinet des Antiques* 初版の序文で、バルザックは、「すでにだ
いぶ書き進められているべつの著作、『ミトゥーフレ家の人々』*Les Mitouffet* は、選挙をめぐる野心のあり様を描きた
すであらう。それは地方の金持の実業家が選挙によってパリに来て、そしてまた地方に帰って行く様を示すであらう」⁽³⁾
と記している。地方の実業家（現行テキストのボーヴィザージュに当る）が、選挙によってパリに出て来る過程を描こ
うとしたことは明らかで、この時点で、作品の主題はほぼ固まったといえる。ただし、主人公の名はまだボーヴィザー
ジュではなく、ミトゥーフレであった。ほぼ同じ頃、すなわち同年四月二十八日、バルザックは、当時「ラ・プレス」
紙で芸欄を担当していたゴーチエに、この作品『ミトゥーフレ家の人々、もしくは地方の選挙』*Les Mitouffet ou
l'Élection en province* の同紙への連載を依頼し、他方、友人のシャルル・ド・ベルナールを介して、「ジュルナル・
デ・デバ」紙への連載も交渉している。⁽⁴⁾ 創作ノート *LoV. A 202* に '*Les Mitouffet (à la Presse)* あるうは、*Les Mitouffet
(à faire)* と記したのもこの頃のことであらう。⁽⁵⁾

ところで、スメットハーストは、『アルシの代議士』の草稿を調査した結果、草稿は、執筆時期をことにする三つの
部分からなることを発見した。⁽⁷⁾ 第一は、一八三九年五月に書き始められたもので、草稿の中のもっとも古い部分に当る
(便宜上、これをAテキストと呼ぶことにする)。第二は、'*L'Ambitieux malgré lui* なる題名のもとに、ロヴァンジュ
ール図書館に所蔵されている断片で、一八四二年八月に書かれた(Bテキストと呼ぶ)。第三は、一八四二年八月と十
二月の間に書き始められた部分である(Cテキストと呼ぶ)。Bテキスト及びCテキストの執筆時期に関しては、スメッ
トハーストの推論は首肯し得るものであり、また執筆の状況に関しても同氏の所論に愧しいのでここでは触れない。
問題はAテキストの執筆時期で、スメットハーストは『アルシの代議士』草稿の表紙、⁽⁹⁾ いわゆる *page de titre* に、バ

ルザックの手で mai. 1839 と記されていることを論拠に、一八三九年五月を執筆の時期としている。

さて、『アルシの代議士』は、いわば、『暗黒事件』*Une Ténébreuse Affaire* の後日談のごとき性格をもつ作品であつて、『暗黒事件』の登場人物やその子どもたちが描かれている。『暗黒事件』が、シャンパーニュ地方、ローブ県の田園地帯を背景に、一八〇三年から一八〇六年にかけての貴族とブルジョアの血みどろな抗争を描いたものとすれば、『アルシの代議士』は、同じローブ県の小都市（すなわちアルシ）を舞台に、一八三九年におけるブルジョアどうしの政治的対立を描いている。『暗黒事件』の時代にはまだ壮年だったゴンドルヴィル伯や、その友人のグレヴァンは、今や老年に達し、事件の主役は彼らの子どもたちである。しかし、王党派の伝統的な貴族たち、サンリシーニュ家の人々と、ブルジョア出身の新興貴族、ゴンドルヴィル伯とのかつての抗争は、『アルシの代議士』にもなお影をおとしていて、選挙をめぐるブルジョアたちの対立に複雑な影響を与えている。『暗黒事件』の筋書きを知ることなしに、『アルシの代議士』を充分に理解するのは不可能ですらある。『暗黒事件』は、一八四一年一月十四日から、同年二月二十日まで「コメルス」紙に連載された作品で、シュザーヌ・ベラールは、同作の執筆開始を一八四〇年夏と推定している。¹⁰⁾

このようなわけで、『アルシの代議士』A テキストの執筆時期の決定は、『暗黒事件』の着想、及び成立の問題にもからんでいる。スメットハーストが考えるように、A テキストが一八三九年五月に書かれたとするならば、『暗黒事件』は、『アルシの代議士』A テキストから生れたことになる。すなわち、ルイ・フィリップ王政下、アルシにおけるブルジョアたちの抗争を主題として作品の想をねり、かつ執筆しつつあるあいだに、バルザックは、『アルシの代議士』の物語より時代をさかのぼること三十年、同じ地方において見られた旧貴族とブルジョアの抗争を主題として、作品を書くことを思いつき、いわば『アルシ代議士』の登場人物たちのルーツを描くことになった、A テキストの執筆が中断されたの

は、ルーツを描くことに作者の関心が奪われた結果である、といえるわけで、じじつスケットハーストはそのように考えている。⁽¹¹⁾これにたいして、シュザーヌ・ベラルは、『アルシの代議士』草稿の表紙にある mai 1839 の覚え書は、執筆の時期を示すものではなく、物語の時期、すなわち、この作品に描かれるべき事件の年代を記すものだとしている。⁽¹²⁾わたしは、次に述べる三つの理由から、Aテキストは、一八三九年五月に書かれたものではないと考える。

(1)草稿の表紙に執筆開始の年月を書き入れた例は他になく、バルザックは、執筆終了の時点で、作品の末尾に、執筆開始と終了（もしくは終了のみの）年月を書き入れるのが常である。mai 1839 の記述は、シュザーヌ・ベラルの論じているように、物語の年代を示すと考えたほうが自然である。そもそもこの表紙には、登場人物その他、作品の内容に関するメモしか書かれていない。また表紙の中央上部に「L'Election en province (A テキスト執筆当時、バルザックは『アルシの代議士』をこう呼んでいた)と大きく書かれ、その下にやや小さく *histoire de 1838* という副題が書かれているところを見れば、当初、物語を一八三八年に設定していたことがわかる。現行テキストで物語の発端は、一八三九年四月である。mai 1839 は、物語設定の一八三八年から一八三九年への移行を示す覚え書と考えられる。⁽¹³⁾

(2)さきにも述べたように、一八三九年四月から五月にかけて、バルザックは、ゴーチエや、シャルル・ド・ベルナールに、作品の発表かたを依頼する手紙を書いているが、その際の題名は、あくまでも *Les Mitouffet ou l'Election en province* である。ところが草稿の表紙に記された題名は、今も述べたように *L'Election en province* である。しかもこの題名は、装飾的な文字で大きく、ていねいに書かれているから、*Les Mitouffet* という題名を略して、副題だけを記入したとは考えにくい。のみならず、この表紙には、登場人物の名が多数記されているけれども、そのなかに *Mitouffet* の名はない。*Mitouffet* は題名になっている以上、明らかに主人公の名であるが、登場人物一覧のなかに主人公の名が

ないのはおかしい。すなわちこの表紙を作成した時点で、*Les Mitouffet* という題名は放棄されていたと考えられる。この作品は、他の多くの作品の場合と同様、着想から執筆への過程でなん度も題名を変えており、それは作者の意図の変化に対応している。題名の変遷を年代順に記せば、*Une Election*; *Les Mitouffet on l'Election en province*; *L'Election en province*; *L'Ambitieux malgré lui*; *Le Député de province*; *Le Député d'Arcis* となる。このうち *Les Mitouffet ou l'Election en province* という題名が最後に言及されるのは、ロジェ・ピエロによって遅くとも一八四〇年一月のもの⁽¹⁴⁾と推定されている、ある出版業者あての書簡においてである。他方、その次に採用された題名、*L'Election en province* は、書簡にはまったく言及がなく、一八四〇年六月刊の『ビエレット』初版序文で言及され、創作ノート⁽¹⁵⁾A. 159 の fol. 14 vo と fol. 15 と *Une Election en province* として記されているのみである。そしてこの fol. 14 vo では mai 1841 と附記され、fol. 15 では、à faire en 1841 として列挙された作品の一つとなっている。こうして見ると、バルザックが *L'Election en province* という題名のもとに『アルシの代議士』を考えていた時期は、一八四〇年から一八四一年にかけてであると推定される。

(3) 『アルシの代議士』草稿の表紙に、人物の一人 Mlle de Cinq-Cygne に関して、13 ans en 1793, 25 ans en 1805, 60 ans en 1840 なる覚え書が見いだされる。後述のように、13 ans en 1793, 25 ans en 1805 は『暗黒事件』の内容にかかわり、60 ans en 1840 は、『アルシの代議士』の内容にかかわると考えられる。草稿が書かれたのが、一八三九年五月とすれば、バルザックは執筆の時から見て未来に属する時代に物語を設定したことになり、これはバルザック小説の一般的性格からして考えられないことである。

以上のような理由から、『アルシの代議士』A テキストは、一八三九年五月に書かれたのではなく、むしろ一八四〇

年、もしくは一八四一年に書かれたと考えたい。では、一八四〇年、一八四一年のいつ書かれたのか。わたしの推定では、それは『暗黒事件』の執筆にきわめて近い時期である。なぜならば、『アルシの代議士』草稿の表紙には、さきにも述べたように、登場人物の名が多数記されているのであるが、その相当部分は、『暗黒事件』にも、主人公もしくはそれにつぐ重要な人物として登場する人々である。すなわちゴンドルヴィル伯、グレヴァン、オートセル伯とその夫人、サンシシーニュ嬢などである。これらの名の存在は、『アルシの代議士』草稿の表紙が作成された時点で、『暗黒事件』の想がかなり熟していたことを当然予想させる。とくに、『暗黒事件』の女主人公サンシシーニュ嬢については、さきにも触れたように、Mille de Cinq-Cygne 13 ans en 1793, 25 ans en 1805, 60 ans en 1840と書かれているが、この記述は、『暗黒事件』の内容を前提としている。なぜならば、一七九三年は、サンシシーニュ館が民衆に包囲され、その民衆にたいし、当時十三歳の少女であったサンシシーニュ嬢が発砲するという事件の起きた年だからである。もっとも『暗黒事件』の現行テキストでは、当時十二歳と記されているが、草稿では十三歳である。他方、『暗黒事件』の物語においてそのクライマックスというべき、ゴンドルヴィル伯の掠奪とそれに続く裁判が行われたのは、一八〇六年で、草稿表紙の一八〇五年とは一年のずれがある。これは、『暗黒事件』の筋書きが細部まではまだ煮つまっていなかったことを示すものであろう。60 ans en 1840の記述はもちろん『アルシの代議士』にサンシシーニュ嬢が再登場する際の年齢と年代を示している。いずれにせよ、『アルシの代議士』草稿の表紙に見られるこれらの記述は、シュザーヌ・ペラールも指摘していること⁽¹⁷⁾、背景に『暗黒事件』の物語を感じさせる。では、『暗黒事件』の執筆のうちに、この表紙が作成された可能性はないか。わたしはないと思う。その理由は次のごとくである。

『暗黒事件』の草稿も、『アルシの代議士』の場合と同じく、未定稿として先に書かれたのち、完成稿のなかにページ

づけを変えて再利用された部分がある。『暗黒事件』草稿の fol. 53 から fol. 59 までで、これはもと「秘密の事件」Une *Affaire secrète* と題されていたテキストである。⁽¹⁸⁾ この部分には、サンシーニュ嬢、ゴンドルヴィル伯など、『アルシの代議士』と共通する人物はまったく登場していない。草稿中のこの部分を、便宣上、草稿Ⅰ、他の部分を草稿Ⅱと呼ぶことにしたい。⁽¹⁹⁾ 作品の大部分をしめるのは草稿Ⅱで、前述のようにシュザーヌ・ベラールの推定によれば、草稿Ⅱが書かれたのは一八四〇年夏以降である。ところで、『アルシの代議士』草稿の表紙に、多数の人物名が記されていることはすでに述べた通りであるが、そのうちサンシーニュ嬢は、まず Mlle d'Hauteserre と書かれ、それが消されて Mlle de Sain [C]-Cygne となり、ついでそれも消されて現在のように Mlle de Cinq-Cygne となっている。ところが『暗黒事件』の草稿Ⅱを見ると、第一ページからはっきり Cinq-Cygne と書かれ、それ以外の名、もしくは綴りが消された痕跡はまったくない。ということは、『アルシの代議士』Aテキスト執筆の段階ではまだ確定していなかった『暗黒事件』の女主人公の名が、『暗黒事件』草稿Ⅱの執筆開始のときには、はっきりと決定されていたことを意味する。したがって、『アルシの代議士』Aテキストは、一八四〇年夏の『暗黒事件』草稿Ⅱ執筆開始以前に書かれたものと考えられる。しかも、『アルシの代議士』草稿の表紙作成時において、『暗黒事件』の筋書きが相当程度明確になっていたことを考えれば、『暗黒事件』草稿Ⅱの執筆開始にきわめて近い時期、おそらくはその直前に書かれたものではないかと推定される。

『アルシの代議士』のその後の執筆と発表の過程を略記すれば、すでに述べたように、一八四二年八月にBテキストが、そしておそらく一八四二年末から一八四三年初めにかけてCテキストが書かれた。その間、一八四二年十一月には

ロカンとバルザックとのあいだで、出版契約がかわされ、『地方の代議士』*Un Député de province*なる題のもとに、一八四三年一月十五日までに完成されるべきことが約された。⁽²⁰⁾ また、一八四二年末から四三年にかけて、この作品についての頻繁な言及がハンスカ夫人あて書簡に見られる。しかし、一八四三年三月十九日付のハンスカ夫人あて書簡⁽²¹⁾では、この作品のさしあたりの放棄が告げられ、同時に、これを『地方生活情景』から『政治生活情景』に移すむねが報ぜられている。しかし、その後もバルザックの関心はこの作品から離れることなく、『人間喜劇』の再版を予定して一八四五年に作成された総目録⁽²²⁾のなかでは、『政治生活情景』中の一編として、『アルシの代議士』の題名のもとに収録が予定されている。さらに、一八四七年になると、四月七日から、*L'Union monarchique* 紙上にこの作品の連載が始まったが、それは、同年五月三日をもって中断された。現在『人間喜劇』に収められているのは、この時に発表されたテキストである。ただし、この折り公けにされたものは、すでに書かれたテキストA、B、Cに若干の加筆を行った程度のものにすぎない。

II 主 題

『アルシの代議士』の主題は、これを三つに分けて考察することができる。つまり(1)地方の資産家が選挙によって代議士となり、パリに出て来る話、(2)『人間喜劇』中の有名な蕩児、マクシム・ド・トラージュが(1)の資産家の娘と結婚する話、(3)『暗黒事件』の後日談、の三つである。むろんこれら三つの主題は、相互に密接に関連しており、とくに(3)は(1)に含まれるともいえる。しかしバルザックにおける物語的想像力の展開をあとづけるには、主題の要素をこのように三つに分解するのが便利である。

(1)の主題はこの作品の発想の出発点をなしたものである。もともと、地方の野心家がパリをめざすのは、『人間喜劇』の大きな主題の一つであり、『ゴリオ爺さん』*Le Père Goriot*のラストニヤックをはじめ、多くの青年たちが地方出身の野心家たちなのだ。けれどもバルザックは、『アルシの代議士』において、青年の若々しい野心を描こうとしたのではなく、むしろブルジョアたちの醜悪な生態を描こうとしたかに思われる。一八四二年十二月二十一日付のハンスカ夫人あて書簡に、『アルシの代議士』は、「実業を行う醜悪なブルジョアの物語」であり、それは、『パリに出た地方の偉人』⁽²³⁾よりも、もっと面白いものになるでしょう。なぜなら、下院の内幕は、文壇の内幕ほどにも知られていないからです。(……)政治家になったブルジョアの肖像を描くこと⁽²⁴⁾と記されている。明らかにバルザックの意図は、ルイフィリップ王政下において政治の主導権を握ったブルジョアを揶揄し、戯画化することにあつた。⁽²⁵⁾またそれによって、ルイフィリップ王政的な立憲政治を批判することにあつた。議会政治の内幕を暴露しつつ、君主制こそよりすぐれた政治形態であることを証明しようとしたのである。同じくハンスカ夫人あての手紙で、バルザックは、『アルシの代議士』をさすと思われる「政治的大作」について言及し、「王権は、あらゆる権力のなかで最良のものであることが証明されるときにも、この作品は、いわゆる立憲政体、すなわち愚者の政治、愚者の神格化、愚者の勝利である立憲政体への憎しみによって書かれたものです⁽²⁶⁾」と記している。

(2)『アルシの代議士』のもう一つの主題は、マクシム・ド・トラージュの物語である。(1)の主題は、発想の順序からいえば古いが、執筆の順序において最初に書かれたのは、「トラージュ物語」、すなわちAテキストである。マクシム・ド・トラージュは、『ゴリオ爺さん』に初めて登場して以来、⁽²⁷⁾『人間喜劇』のさまざまな作品に姿を現わす蕩児である。名門の貴族であるとともに大浪費家であり、賭博と決闘の名手であり、女性にたいしては残酷をきわめる。ド・マルセーヤ、

モンリヴォール將軍らとともに、秘密結社十三人組に所属し、パリの社交界に生きるいわゆる洒落者リコロのなかでも、もっとも恐るべき、かつもっとも俊敏な人物である。

Aテキストが描いているのは、このマクシム・ド・トラージュの、いわば老いたる蕩児としての姿である。彼は、「七月革命が生んだ唯一の大政治家」、ド・マルセーの腹心として、二、三の政治的陰謀に参加しながら、四十八歳になった今も官職をもたず、浪費がたたつて借金で首がまわらない。そこで彼は、金持の娘と結婚することで財産を得、蕩児としての生活に終止符を打つ決心をかためる。大臣になっている友人のラステイニャックに相談をもちかけると、ラステイニャックは彼をアルシに派遣する。なぜならば、アルシでは、間もなく行われる選挙で、反政府系の候補者が勝ちそうな気配だからで、もしもトラージュの画策によって、その地方の資産家を政府系の代議士にしたあげることができれば、トラージュは、その資産家の娘と結婚することができ、官職によってもむくわれるはずだ。Aテキストは、アルシにむけてトラージュが発券するところで終っている。Aテキストはもっとも早い時期に書かれた部分であるが、現行のテキストでは、作品の最後に来ていて、その前に、アルシでの選挙をめぐる動きと、トラージュのアルシへの到着が描かれている。トラージュとおぼしき不思議な人物のアルシへの到着をさきに読者に知らせたあと、二ヶ月の時間をさかのぼって、その理由を説明しているわけで、これは読者の好奇心に訴えるための作者の巧妙な技法である。

一八二九年刊の『ふくろう党』*Les Chauans* 以来、バルザックが創りだして来たあまたの登場人物は、『人間喜劇』という小宇宙のなかで生き続け、作者とともに老いて来た。作者は、再登場させるたびに彼らを年とらせ、彼ら登場人物たちの運命を完結させようと努めたかに見える。『アルシの代議士』に言及されている人物だけに限っても、ド・マルセーはすでに故人となり、四十歳になったラステイニャックは、長年の恋人、マシンゲーム夫人の娘と結婚した

ばかりである。蕩児トラリュの結婚を物語り、はなやかな洒落者としての彼の生涯を完結させようと、作者はいつから考え始めたのだろうか。『アルシの代議士』を、トラリュの物語として、バルザックがはじめて言及するのは、一八四〇年六月刊の『ピエレット』初版序文においてである。バルザックはそこで、「もつとも恐るべき独身者の一人、マクシム・ド・トラリュは結婚する。この結婚は『地方の選挙』 *Une Election en province* のなかで行われつつあるところだ」と書いている。『アルシの代議士』を *Les Nittouflet* と呼んでいた段階では、トラリュについての言及がまったくないところを見ると、*Les Nittouflet* から *L'Election en province* への改題は、トラリュを物語の中心にすえようという、作者の新しい意図に照応しているように思われる。地方の資産家をもっぱら主題とするならば、この資産家の姓を題名とすることもできようが、物語中においてトラリュが、主役もしくは主役に近い役割を演ずるとあれば、『ミトゥーフレ家の人々』という題名は、もはや内容にそぐわないものとなったにちがいない。したがって、この作品がいわば「トラリュ物語」のごときものとなったのは、この作品が *L'Election en province* と呼ばれるようになった、一八四〇年以降のこととわたしは考えたい。おそらくバルザックは、選挙に関する(1)の主題をあためているうちに、これを老いたるトラリュの物語と結びつけることを思いつき、Aテキストを書いたのである。

『アルシの代議士』が未完に終わったため、アルシにおけるトラリュの画策はついに描かれなかった。また、彼が地方の資産家の娘と首尾よく結婚するいきさつも、『人間喜劇』の読者には、ついに知らされなままに終わった。しかし、作品に書かれこそしなかったものの、トラリュの結婚は、作者の想像のうちにおいては、すでに既成の事実としてはつきりと定着していたように思われる。なぜならば、一八四四年末から一八四五年初めにかけて発表された、『ベアトリックス』 *Beatrix* 第三部において、トラリュは、結婚をすでに半月後に控えた男として描かれているからである。彼はグ

ランリユー公爵夫人の依頼に応じて、公爵夫人の娘婿、カリストが、あばずれのロシュフィード夫人と手を切るように画策することになるのだが、それは自分の結婚相手である「金持ちだが、きわめてブルジョア的なあととり娘」⁽³⁰⁾をグランリユー公爵夫人の貴族的なサロンに迎え入れてもらいたいからである。のみならず、作品の末尾で、カリストにむかってトラリュは、「人間のもつ天上的な要素は、天のうちにししか養分を見いだし得ないから」、美しいもの、天上的なものを女性に求めても空しいことを説き、「自分は昨日結婚したのだが、妻にたいしては忠実な夫となるつもりだ」⁽³¹⁾と語る。『アルシの代議士』に書かれるはずだったトラリュの結婚は、書かれないままに、他の作品の筋書きを決定したことになる。それだけではない。アンソニー・ピューは、一八四四年に書かれた断片『若い寡婦の計画』*Programme d'une jeune veuve* 草稿の表紙に書きつけられ、かつ消された登場人物の名を解読して、そのなかにマクシム伯爵夫人 *comtesse Maxime* の名を発見している。そして、「若い寡婦」とは、マクシム・ド・トラリュ伯爵夫人のことになるまいと推定している。⁽³²⁾もしピューの推測が正しいとすれば、バルザックはトラリュの死をもすでに構想していたことになる……

(3) 第三の主題は、『暗黒事件』の後日談としての要素である。この主題は、A テキスト執筆の段階では、まだ作者の念頭になかったように思われる。なぜならば、A テキストには、『暗黒事件』の人物は一人として言及されておらず、唯一の例外は、末尾近くに、サンリシーニユ家の名があげられていることだが、シュザンヌ・ペラールによれば、これは後から草稿に加筆されたものだという。⁽³³⁾他方、『暗黒事件』の草稿断片⁽³⁴⁾において、事件は、アンジュー地方に設定されているから、当初『暗黒事件』が『アルシの代議士』とは無関係に構想せられていたこともまた明らかである。おそらく『アルシの代議士』A テキストの執筆中、もしくは執筆直後に、バルザックは『アルシの代議士』と『暗黒事件』を

結びつけることを思いつき、Aテキスト原稿の表紙に、登場人物たちの名を書きつけ、そのうちの多くを『暗黒事件』にも共通する人物としたのである。他方では、Aテキスト執筆の直後に書き始められたと思われる『暗黒事件』草稿Ⅱにおいて、舞台をアンジュー地方からシャンパーニュ地方に移し、地理的にも『暗黒事件』と『アルシの代議士』を相関させたのであろう。

以上のごとく、『アルシの代議士』の着想と執筆の過程をたどるならば、バルザックの物語的想像力のうちにおいて主題と主題が複雑にからみあっていることが理解される。主題は主題を呼んで複合体となり、計画中の作品はあたかも自律的な有機体のように、新たな統一を求めて生成して行くのである。当初まず着想せられたのは、地方の資産家が選挙によってパリに進出するという主題であった。ついでバルザックは、この選挙を成功に導くのは、政府によってひそかにパリから送られた策士の力によるものとし、しかもその策士をマクシム・ド・トラージュとすることで、この作品をトラージュの結婚、及び放蕩生活への訣別の物語とすることを思いついた。こうしてバルザックは、おそらく一八四〇年夏、トラージュ物語であるAテキストを書いた。しかし、Aテキストの執筆中、もしくは執筆の直後に、すでにその草稿Ⅰを書き始めていた『暗黒事件』とこの作品を結びつけるという想をバルザックは得た。そこで作者は、Aテキスト草稿の表紙に、両作に共通し得る人物の名を書きつけた。そして舞台を移し、想を新たにして『暗黒事件』草稿Ⅱを書き始めたのである。Aテキストの執筆がいったん放棄されたのは、こうして新たな想を得た『暗黒事件』の執筆にバルザックの関心が奪われたからである。また『暗黒事件』の完成後でなければ、その後日談たる『アルシの代議士』の筋立てに、遺漏なきを期し難いと判断したためであらう。

バルザックの他の作品の場合と同様、『アルシの代議士』の着想と執筆の過程にも、『人間喜劇』を有機的な統一体たらしめようとする意図がうかがわれる。たんに人物においてだけでなく、地理的にも、物語的にも、作者は、作品と作品とを密接に結びつけようとした。『アルシの代議士』は『暗黒事件』の後日談であるだけでなく、「トラリュ物語」であるという意味では、『ゴブセック』や『ゴリオ爺さん』の後日談でもある。同じことを他面からいえば、『人間喜劇』のすでに書かれた部分が、まだ書かれていない部分を強く規制したのである。その結果、作者はしだいに多数の人物を登場させることになり、⁽³⁵⁾新たな作品の構想は、すでに書かれた作品と矛盾しないためには、その可能性の幅をせばめられることになった。同時に、筋立てもしだいに複雑なものとならざるを得なかった。『アルシの代議士』だけでなく、一般に一八四〇年以降において未完に終わった作品を考える場合、バルザックの物語的想像力が受けたこのような制約、もしくはこのような重圧について考慮する必要がある。

注

- (1) Honoré de Balzac : *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard. フト『*La Comédie humaine*』の引用はこれによる。
- (2) «*Pensées, Sujets, Fragments*», *Œuvres complètes de Balzac*, éd. Club de l'honnête homme, t. XXVIII, p. 684.
- (3) Préface de la première édition du *Cabinet des Antiques, La Comédie humaine*, t. IV, p. 960.
- (4) *Correspondance*, éd. Roger Pierrot, t. III, pp. 596-597.
- (5) *Ibid.* pp. 597-598, p. 602.
- (6) *Recueil de couvertures de manuscrits, de titres d'œuvres et notes diverses*, Collection Lovenjoul (フト Lov. 略ナ) A. 202, fol. 1 et fol. 3.
- (7) Colin Smethurst : «Introduction à l'étude du *Député d'Arçis*», *L'Année balzacienne* 1967, pp. 223-240. 又『同じ筆者

- (8) Lov. A. 3. *La Comédie humaine*, t. VIII, pp. 1598-1601.
- (9) Lov. A. 55, fol. B. 484° *Œuvres complètes de Balzac*, éd. Club de l'honnête homme, t. XII. 以下の写真版がある。ここでは *La Comédie humaine*, t. VIII, p. 1595-1596 の Smethurst 以下の転記がある。これは蛇足ながら、Aチキストの草稿の表紙が、その中『モリスの代議士』の草稿の表紙と同じ用いられた。
- (10) *Une Ténébreuse Affaire*, histoire du texte par Suzanne-J. Bérard, *La Comédie humaine*, t. VIII, pp. 1451-1452.
- (11) *Le Député d'Arcis*, histoire du texte, *La Comédie humaine*, t. VIII, p. 1589.
- (12) *Une Ténébreuse Affaire*, histoire du texte, *ibid.*, pp. 1449-1452.
- (13) *Le Député d'Arcis* の末尾に近づく『タンタ・ユ・トーロ』の服装の描写が「vêtu selon la mode de 1839」(*La Comédie humaine*, t. VIII, p. 809) とあるが、これは草稿の「vêtu selon la mode de 1838」とは違う。
- (14) *Correspondance*, éd. cit., t. IV, p. 33.
- (15) *Notes sur le classement et l'achèvement des œuvres*, Lov. A. 159.
- (16) le manuscrit de *Une Ténébreuse Affaire* (パリ国文学館蔵) Na fr 14318. 草稿の fol. 10 とは *treize ans* とあるが、fol. 9 では、*douze ans* と書かれて一度 *treize ans* に直されたのが、再び *douze ans* とされている。女主人公の年輪に関する若干の混乱がしづなためうかがったものと思われる。
- (17) *Une Ténébreuse Affaire*, histoire du texte, *La Comédie humaine*, t. VIII, p. 1450.
- (18) *Ibid.*, p. 1451.
- (19) *Le Grand Homme de Province à Paris* (1478-1479) 草稿と *Madame Hanska* 草稿との断片と呼ぶところがある (*ibid.*, pp. 1478-1479)。
- (20) *Traité avec Louis-Fortuné Loquin, Correspondance*, éd. cit., t. IV, pp. 515-518.
- (21) *Lettres à Madame Hanska*, éd. Roger Pierrot, t. II, p. 177.
- (22) *Le Catalogue de 1845* とある。 *La Comédie humaine*, t. I, pp. CXXIII-CXXV.
- (23) *Un Grand Homme de Province à Paris* とある。 *Illusions Perdues* 第二巻。

- (24) *Lettres à Madame Hanska*, éd. cit., t. II, p. 138.
- (25) 一八四七年の『*Union monarchique*』紙掲載の際の加筆にまつて、とりわけ戯画化の意図が顕著である。
- (26) *Lettres à Madame Hanska*, éd. cit., t. II, p. 157.
- (27) 現行のテキストでは『*Gobseck* (一八三〇年刊)』にすでに登場しているが、これは一八三五年版からの修正で、『*Gobseck*』初版ではたんに『*Le vicomte*』であるのみである。
- (28) *Le Député d'Arcis, La Comédie humaine*, t. VIII, p. 804.
- (29) Préface de la première édition de *Pierrette, La Comédie humaine*, t. IV, p. 22.
- (30) *Beatrix, La Comédie humaine*, t. II, p. 910.
- (31) *Ibid.*, p. 940.
- (32) Anthony R. Pugh: *Balzac's recurring characters*, Toronto, University Press, 1974, p. 356.
- (33) *Une Ténébreuse Affaire, histoire du texte, La Comédie humaine*, t. VIII, pp. 1451-1452.
- (34) *Ibid.*, pp. 1478-1479.
- (35) 『アルシンの代議士』の書かれた部分についてだけを見ても、登場人物の数は相当数に達し、一八四三年一月十日付のハンスカ夫人あて書簡 (*Lettres à Madame Hanska*, éd. cit., t. II, p. 147) によって見れば、完成後、人物の総数は、百人ばかりになる予定であった。